「通年型カーリング場」を基盤とした総合型地域スポーツクラブの取り組み
～「SC 軽井沢クラブ」視察を事例に～

侘美　俊輔

● 要　約

スポーツ庁の最新の統計によると，北海道内の総合型地域スポーツクラブの「育成状況」は全国ワーストの 52%である．このような状況の中，北海道稚内市では 2020 年 5 月に「通年型カーリング場」を備えた複合型施設の「みどりスポーツパーク」が建設され，その後 2022 年 4 月に総合型地域スポーツクラブ「みどりスポーツクラブわっかない」が誕生した．2022 年 10 月に「みどりスポーツクラブわっかない」の理事ら 10 名は，長野県軽井沢町の総合型地域スポーツクラブ「SC 軽井沢クラブ」へ先進クラブ視察を行った．

周知のとおり「SC 軽井沢クラブ」は，2024 年の日本カーリング選手権大会において男子が準優勝，女子が優勝であった．さらに 2022 年 5 月の「世界ジュニアカーリング選手権大会 2022」において，初優勝した日本女子代表メンバーの 5 名中 4 名が同クラブのジュニアチームのメンバーであった．同時に「SC 軽井沢クラブ」の「稼ぐ力」を内包している経営戦略は，多くの研究者によって注目されている．

そこで，本稿の目的は「みどりスポーツクラブわっかない」の理事らによる「SC 軽井沢クラブ」への先進クラブ視察に注目し，その「会議録」をもとに今後の同クラブの方向性を検討するための基礎資料とすることである．

● キーワード

通年型カーリング場
カーリング
稼ぐ力
総合型地域スポーツクラブ
部活動の地域移行

はじめに

スポーツ庁によると「総合型地域スポーツクラブ」は，「人々が，身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで，子供から高齢者まで（多世代），様々なスポーツを愛好する人々が（多種目），初心者からトップレベルまで，それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向），という特徴を持ち，地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブ」とされる．総合型地域スポーツクラブは，1995 年から育成が開始され，2017 年 7 月には「創設準備中」を含め 3,580 クラブが育成されており，「それぞれの地域において，スポーツの振興やスポーツを通じた地域づくりなどに向けた多様な活動を展開し，地域スポーツの担い手としての役割や地域コミュニティの核としての役割を果たしています」とある．しかしながら，2022 年度版「総合型地域スポーツクラブに関する実態調査」（スポーツ庁，2022）によると，北海道内の総合型地域スポーツクラブの「育成状況」は，全国ワーストの 52％である．その要因として地理的な広域性，経済の低迷，自治体の体力，少子高齢化，過疎化，受益者負担の意識など様々な点が推察されるものの，全国ワーストの「育成状況」という事実から，北海道は総合型地域スポーツクラブを育成しにくい地域の 1 つであると考えられる．

一方，総合型地域スポーツクラブにとって「追い風」となる事象も誕生している．2023 年以降に実施することが決定した「部活動の地域移行」である．2022 年 6 月及び 8 月には，スポーツ庁に設置した部活動の地域移行に関する検討会議から各提言が示され，友添（2023）は「地域移行後の地域スポーツクラブ＜運動部活動＞はわが国のこれからのスポーツのあり方を大きく変換し，さらに，わが国の新しいスポーツ文化創造のプラットフォームなっていくだろう」と期待を示している．

ところで，近年スポーツは，2022 年度から開始された「第 3 期スポーツ基本計画」において，「スポーツによる地方創生，まちづくり」がテーマの 1 つとして位置付けられた．原田（2020）は，「パワー・オブ・スポーツ(Power of Sports)」という言葉が世界的に流行している背景には，「スポーツが社会を動かす経済的な力を持つようになったという事実がある」ことを指摘する．その上で「補助金に頼らず，財政面で自走化できる『稼ぐ組織』をどのように作るかという問題にフォーカス」し，総合型地域スポーツクラブにおいて「『事業性』という概念が欠落している」と指摘する．原田は，同書において「SC 軽井沢クラブ（特定非営利活動法人）」の取り組みに着目している．同クラブの特徴は，「大規模な町営運動施設をクラブ指定管理者として一括管理」いる点，マラソン，サイクリングなどの「アウター的集客事業」に力を入れている点，「スポーツマーケティング部という攻めの経営を担う場所」を配置し，MICE，インバウンド対応など「観光地としてのアドバンテージを活かした域外との交流事業が行われている」と評価する．また，この事例を総括して「インナー・アウターの両方に＜稼ぐ力＞を内包している」と指摘する．

間野（2013）は，「SC 軽井沢クラブ」について 1998 年の長野五輪終了後に「町の人たちがもっとスポーツに触れる機会を増やそう」と，「カーリング以外のスポーツも楽しめる」総合型地域スポーツクラブを立ち上げ，「長野オリンピックのレガシーをしっかり受け継ぐとともに，日本のカーリング文化の発展に貢献している」と評価している．さらに間野（2019）は，「SC 軽井沢クラブ」を事例としながら，軽井沢のブランド，避暑地としての華やかな裏側で，補助金に頼らない形で，住民の合意形成，指定管理者制度の受託で成功している様子を「地元住民の人たちが地道に取り組んできた，ソフト・レガシーの物語」として描いている．

これらの指摘から，総合型地域スポーツクラブは，地域住民による自主的・主体的な運営を基本としつつも，地域における持続的な組織となるためには，採算性，経営的な安定性を無視して運営することは避けられない．つまり「稼ぐ力」が必要になるものと考えられる．

ところで北海道稚内市（以降，稚内市とする）では，2020 年 5 月に「通年型カーリング場」を備えた複合型施設の「稚内市みどりスポーツパーク（以降，みどりスポーツパーク）」が誕生した．2020 年 5 月に「通年型カーリング場」を備えた複合型施設のみどりスポーツパークの指定管理者には，「特定非営利活動法人稚内カーリング協会（以降，稚内カーリング協会）」が選定された．2019 年 12 月から公募が開始された「稚内市みどりスポーツパーク指定管理者募集要項（稚内市教育部社会教育課スポーツ推進グループ，2019）」には，「(4)事業の実施に関する業務」の 1 つとして「① 総合型地域スポーツクラブ設立に向けた準備」がある．さらに具体的には，「指定管理者は、スポーツ関係団体と連携を図り、稚内市みどりスポーツパークを拠点とした総合型地域スポーツクラブ設立に向けた準備を進めていくこと」と明記されている．その後，2022 年 4 月に総合型地域スポーツクラブ「一般社団法人みどりスポーツクラブわっかない（以下，「MSC わっかない」とする）」が誕生した．

上述の経緯を踏まえて，2022 年 10 月に「MSC わっかない」の理事ら 10 名は，長野県軽井沢町を拠点とする総合型地域スポーツクラブ「SC 軽井沢クラブ」への先進クラブ視察を行った．その際，「SC 軽井沢クラブ」からクラブの概要，ジュニア育成等の説明を受け，その後質疑応答形式の 2 時間半にわたる情報交換の会議を行った．本稿はこの先進クラブ視察時の「会議録」に着目し，構成されたものである．

「MSC わっかない」が先進クラブ視察を行った「SC 軽井沢クラブ」の男子チームは，2018 年の平昌オリンピック男子カーリング代表，その後メンバーの加入，脱退を繰り返しながら，2023 年 2 月の日本カーリング選手権大会において 2 連覇を達成している（2024 年大会は準優勝）．一方の女子も近年実力をつけており，2024 年 2 月に開催された日本カーリング選手権大会において優勝した．また，2022 年 5 月にスウェーデンで開催されていた「世界ジュニアカーリング選手権大会 2022」で，初優勝した日本代表女子メンバーの 5 名中 4 名が SC 軽井沢クラブのジュニアチームのメンバーであった．以上のことから，SC 軽井沢クラブは，「通年型カーリング場」を基盤とする「MSC わっかない」とハード面においては共通性，類似性があり，ソフト面では先進性があるものと推察される．

以上を踏まえた上での問題意識は，以下の 2 点である．第 1 の問いとして，「SC 軽井沢クラブでは，どのようにして選手育成や，住民への生涯スポーツを実施しているのか」という点，第 2 の問いとして「どのようにして経営的に安定したモデルを作り出すのか」という点である．

そこで，本稿の目的は，「MSC わっかない」の理事らによる「SC 軽井沢クラブ」の先進クラブ視察に注目し，その「会議録」をもとに今後の同クラブの方向性を検討するための基礎資料とすることである．

「MSC わっかない」が拠点とする稚内市は，同市の公式ホームページによると，「宗谷岬からわずか 43km の地にサハリン（旧樺太）の島影を望む国境の街」であり，「『水産』・『酪農』・『観光』を基幹産業とする宗谷地方の行政，経済の中心地」である．2024 年 1 月 31 日現在の人口は 30,000 人程度である．

一方，「MSC わっかない」の理事らが訪れた「SC 軽井沢クラブ」については，前掲の原田，間野の

著作など従前から研究の対象とされてきた．本稿では彼らが主眼としていた同クラブの経営的，政策的視点に触れつつも，カーリングの普及，選手強化の仕組み，アスリート支援など競技スポーツや，生涯スポーツとしての側面ついても検討を加える．

１．総合型地域スポーツクラブ「MSC わっかない」

「MSC わっかない」のホームページを参照したところ，同クラブの経営理念は，「私達は，稚内市を中心とした宗谷地域における，あらゆるスポーツ活動の実情に合わせ，地域のみなさんのスポーツ活動がより充実し，持続可能となるお手伝いをさせて頂きます．そして，スポーツが未来に繋がる，『スポーツ都市・稚内』を実現するため，地域に愛されるクラブを目指しています」とある．

以降では，みどりスポーツパークの公式ホームページ，「MSC わっかない」より提供頂いた会議資料，理事会資料等を参照しながら，「MSC わっかない」設立までの時系列の簡潔に整理する．

１－１．稚内市総合型地域スポーツクラブ「設立準備委員会」

第１回の会議は，コロナ禍の 2021 年 3 月 30 日に開催された．以下では，みどりスポーツパークのホームページに掲載された内容を引用する．() は筆者による注釈である．

> 昨日（2021 年 3 月 30 日），総合型地域スポーツクラブの第１回設立準備委員会会議を終える事ができました．
>
> 市内の関係団体の方々ら，13 名にご参加頂きまして，議事について検討して頂きました．
>
> まずは１回目という事もあり，各委員の皆さまとの顔合わせといった意味合いもありましたが，一言づつ（ずつ）ご挨拶頂いたお言葉から，総合型地域スポーツクラブに対する期待感が感じられ，今後の取り組みが益々楽しみになって参りました！
>
> これから，定期的に議論を重ねて，より良い総合型地域スポーツクラブを，生み出す事ができるように進めてまいります．

2021 年 6 月には，筆者が講師を務め「総合型地域スポーツクラブとは？～稚内らしさの探索～」という題目で，講演とグループワークを実施した．筆者の講義の中では，前述の原田の指摘等を引用し，「稼ぐ力」の重要性を強く訴えた．また，グループワークでは「稚内のスポーツ界，スポーツ環境」などの「ラベルワーク」を実施した（写真１）．

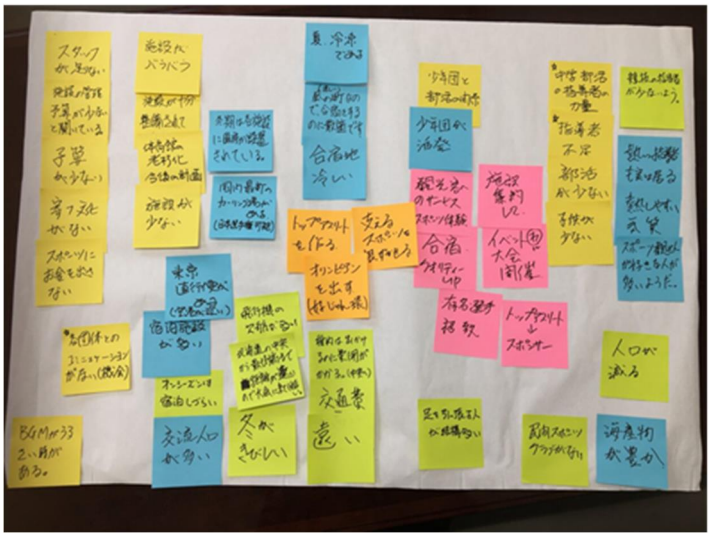

写真１　「ラベルワーク」の様子（写真提供：「MSC わっかない」）

これ以降，2021 年 7 月 3 日のカーリングスクールを皮切りに，プライベートジム，トレーニングセミナー，アクティブチャイルドプログラム「あそびのひろば」などの稚内市総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会プレ事業を実施した．「あそびのひろば」は，現在もその後も月 1，2 回程度の頻度で開催されている．

なお 2021 年は，周知のとおり「コロナ禍」であり，度重なる「緊急事態宣言」などの影響を受け，みどりスポーツパーク，「MSC わっかない」ともに影響を受けた．

１－２．総合型地域スポーツクラブの誕生とその概要

2022 年 4 月 22 日に「総合型地域スポーツクラブ」として産声をあげたものの，愛称，会員の募集，ロゴマークなどはまだ未決定・未実施であった．すべてが整った「グランドオープン」は，2022 年の 10 月 10 日であった（写真２，３，４）．

写真２　グランドオープン当日の実施プログラム（写真提供：「MSC わっかない」）

写真３　グランドオープン時に実施されたボールプログラム（写真提供：「MSC わっかない」）

写真４　グランドオープン時に実施されたカーリングプログラム（写真提供：「MSC わっかない」）

2022 年 4 月には，「クラブ名決定選挙」と題して市民に 7 つの候補から投票を行ってもらい，その結果，「みどりスポーツクラブ」が選ばれた．2022 年 10 月にみどりスポーツクラブの公式ホームページが立ち上がり，会員の募集が始まった．会員は「利用会員」と「スポンサー会員」の大きく 2 つにわけられる．利用会員は通常のスポーツクラブにおける利用者的な意味合いである．一方の「スポンサー会員」は，「応援会員」，「運営会員」，「協賛会員」の 3 つにわけられる．2024 年 1 月現在，応援会員は 10 社+1 人，運営会員 27 名，協賛会員は 5 社である．

さらに 2023 年 4 月からは，みどりスポーツパークの「指定管理者」となり，業務を多角化している．前述の指定管理者となったことに対して，「MSC わっかない」の代表は，クラブが「公益性，収益性のバランスを考えた事業を提供できるクラブ運営」ができるようになったとし，以下のように寄稿している（木村，2023）．

> クラブは活動拠点であり指定管理施設である「みどりスポーツパーク」を中心に，その理念に基づき市民がスポーツに触れあう機会を提供するため，様々なプログラムを企画し

提供をしています．中でも「カーリング体験」は「多世代」の市民で賑わっています．

またクラブでは，幼少期の発育発達運動から一人一人の身体特性を数値化し，子どもたちの適性スポーツを理解するための運動教室事業も開催しています．こちらは民間企業とフラン チャイズ契約を結び，質の高い完成された運動教室となっております．本運動教室はシステムも構築されているプログラムなので顧客満足度が高く，収益性も見込める事業となっています．組織として経営基盤を強固に発展しながら，より良いサービスを提供していく為に「公益性と収益性のバランス」を考えた事業展開を意識して運営しています．

以上のように，2024 年 1 月現在，「MSC わっかない」は誕生から 1 年 4 カ月あまりが経過し，会員数，活動の幅，内容を徐々に増加させながら今日まで運営されている．

２．「SC 軽井沢クラブ」における取り組みと質疑応答

「MSC わっかない」の理事会資料を参照したところ，2023 年 6 月の第 4 回「MSC わっかない」の理事会において，「先進クラブ視察」の候補地が議論された．その際，長野県軽井沢町，新潟県村上市，北海道美幌町など様々な候補地が上がったものの，最終的には「通年型カーリング場」を基盤とした総合型地域スポーツクラブを運営している長野県軽井沢町（以下，「軽井沢町」とする）の「SC 軽井沢クラブ」が視察先として決定された．

２－１．「MSC わっかない」による「SC 軽井沢クラブ」視察の概要と調査方法

「MSC わっかない」の理事ら 10 名による先進クラブ視察は，2022 年 10 月 19 日に実施された．「SC 軽井沢クラブ」側の視察対応は，理事ら 4 名，ならびに一社）軽井沢町振興公社の 2 名であった．会議は，午前中に 2 時間半（写真 5），午後に施設見学が実施された（写真 6，7）．

本稿では，総合型地域スポーツクラブについての意見交換が行われた「午前の会議」のみに注目する．午前の会議における主な説明は理事 A さん，カーリングの「未来プロジェクト」については B さん，冒頭の挨拶等は C さんが行った．午前の会議における 5 割程度は A さんの説明，その後 2 割程度は B さんの説明，残りの 3 割が質疑応答であり，稚内側の質問の多くは事務局担当の D さん，ならびに筆者が実施し，回答は主に A さんが担当した．

本会議録は，すべての出席者に音声使用の承諾を得たのち，ボイスレコーダーに録音した．得られた音声データは，（2022 年当時）育英館大学の学生によってテープ起こしを行い，トランスクリプトを作成した．なお，テープ起こしを担当した当該学生に対し，個人情報保護についての教育を徹底した．

以降の節では，この会議録の内容をそのまま提示しているが，一部固有名詞，具体的な金銭の額面などが出てきた場合は，【　】による差し替えを行っている．また，前後の文脈，注釈が必要な場合は（　）で筆者による加筆を行った．

写真５　挨拶をする「MSC わっかない」の代表者

写真６　軽井沢アイスパークにおける小学生向け体験レッスンの様子（風越公園内）

写真７　人工芝が張り巡らされた「グラウンド」（風越公園内）

２－２．「保健休養地」としての軽井沢町における「SC 軽井沢クラブ」

「SC 軽井沢クラブ」のある軽井沢町は，同町のホームページ「軽井沢町の誕生と発展」によると，以下のような記載がある．

> 明治に移り，鎖国が解けてから一変する．このまちに吹く風の魅力を最初に発見したのは，カナダ生まれの英国聖公会宣教師だった．それは 100 年以上も前のこと．やがて激しく噴煙をあげる機関車が平野の果ての山を穿って走り抜け，さらに電化．すると多くの人々が夏のさわやかな風を誉めたたえ，また，多くの芸術家が創作の場にこのまちを選んだ．こうしてまた 100 年が過ぎ，首都との距離は 1 時間．夏と冬，2 回のオリンピックで世界中の人々を迎えた．いったい何が変わり，何が変わらないのか．ひとつだけ言えることは，このまちを抱くように裾野を広げる浅間山の姿と，そこを吹きぬける風は変わらない．これからの 100 年も私たちは火山の麓に生まれた，宝石のようなまちの自然と暮らしを愛していきたい．

また，会議に参加した C さんからも下記のような挨拶があった．

> 軽井沢町は，ご案内の通り，今は保健休養地として発展してるわけですけど，この歴史は古くですね，日本書紀に長倉の町とされているという歴史があります．江戸時代には中山道の交通の要衝として，三つの宿場を持って栄えて参りました．明治になりまして，い

ろいろ制度が変わりまして，すっかり廃村のような状態になったんですね．静かな高原の村というのが，その当時の軽井沢の様子だったようです．そこで明治の 19 年にアレキサンダー・クロフト・ショーという外国人宣教師が，宣教の途中で，この地に寄って祖国のスコットランドに非常に気候がよく似ているということでえらく気に入りまして，日本に出向いている宣教師の仲間に夏は軽井沢で合宿しようというようなことで，宣教師の皆さんを中心にこの軽井沢を広めていただきました．以来，政界財界の皆さんに，この軽井沢の地で休養していただいてというようなことで，この気候がですね，非常に好まれまして，そのショーさん曰く，「軽井沢は屋根のない病院だ」というようなことで，都会の中で疲れた体と心を軽井沢に来ることによって癒して帰っていただく，というようなことで，今は保健休養地としてその役割を果たしているところでございます．観光客もですね，年間 800 万人を超えると言われておりますけれども，そうした中で最近ではなんとなくショッピングとかというようなことで，少し色合いは変わってるんですけれども，軽井沢が持っている本来の力というのは，先ほど申しましたように，保健休養地としての役割だと思っております．そうした中で，軽井沢に訪れて心身ともに健康になるためには，やはりこの恵まれた自然と，そしてその自然を利用したスポーツによるプログラム，あるいはまた医療，こういったものがタッグを組んで，訪れる人に提供できるんであれば，さらに軽井沢に来て，健康になって帰ろうよというようなものができてくるんではないか．そんなことから今も軽井沢は発展をしているところでございます．

本事例でフォーカスする「SC 軽井沢クラブ」は，こうした軽井沢町の系譜のもとに 2004 年「スポーツの輪，笑顔の輪～活き活きとした，ひとにやさしいまち，軽井沢へ」を活動理念に，「トップアスリートの輩出」，「ユニバーサルなスポーツ健康づくり」，「子どもたちの健全育成」，「健康づくりの場の提供」，「スポーツツーリズムの推進」の 5 つの地域に根差した活動を行っている．なお「SC 軽井沢クラブ」の時系列，詳細は，前述の間野による「オリンピック・レガシーが生んだカーリングの町・軽井沢～『SC 軽井沢クラブ』の挑戦～」を参照いただきたい．

２－３．「SC 軽井沢クラブ」の立ち上げ

本節では，「SC 軽井沢クラブ」による説明，発言録をもとに 4 つの「小見出し」にわけて紹介する．なお，以降の節でも見られる各「小見出し」は筆者が独自に付けたものであり，話者らが意図的に作成したものではない．

総合型地域スポーツクラブとしての使命　～自分たちでお金を生み出しながら地域貢献～

総合型地域スポーツクラブって私の捉え方は，公共的な任務も負ってはいるんだけど，やっぱりスポーツ協会とか，スポーツ推進審議会とは根本的に違う，そういう存在だというふうに思ってます．一番の違いは，行政のお金で公共的なことをやる．そういうところではなくて，もちろんそこも含まれるんですけど，自らがお金を生み出しながら，地域に貢献していく活動するのは，総合型地域スポーツクラブと思ってまして，そういうことを

考えたときにお金をどうするかっていう議論に切実な問題になっている.

健康保持のための運動指導

施設の特徴なんですけど，理学療法士と健康運動士の共同でリスク管理をきちんとやりながらですね，健康保持のための運動指導を行うっていうのが１つ「ミソ」になっております．そこのプログラムのコアは陸上でのストレッチ，あと水中運動，施設内にプールありますけれども，いわゆる水泳用のプールではなくて，水中運動用の専用のプールがこの施設内にございます．よくあるマッタリした雰囲気でトレーニングしてます．運動指導を入れてお客さんを集めようというようなところが１個目玉になってまして，そこも不定期ではあるんですけれどもご希望があれば，各公民館に集中指導に伺うと，そういったことをやらせていただいております．さっき健康増進等の話をしましたけれども，近くまで来てくれる場合やるよっていうお年寄りも実際は結構多いので，そういった方たちをフォローするための取り組みになってます．あと「クラブインクラブ」ですね，これこれは緩いサークルみたいなものなんですけど，これ自らが主催してやるっていうよりかはサークル活動の支援をクラブがやる.

クラブ設立当時の行政，教育長の反応

（C さんによると）20 年前でしたっけ，総合型を各自治体の市町村のスポーツクラブ作りましょうっていったときには，町として何かあまり乗らなかったっていうか，無理だろうっていう．ただそのときのね．その当時の教育長が非常に積極的に協力をしてくれたんですけども，町としては何かピンときてなかったね．要は町の中にしてもね，スポーツ協会，当時の体育協会があってそれが活動している，それなのに「わざわざその新しいクラブをつくるか」って話ですよね．いや，もうそうですよ．だけど当時の教育長は，それはやっぱり新しく作ることに協力的で，ご自分も会員になってくれて，ずっと長い間会費払ってくれてたよね.

クラブ設立当時の既存団体とのバッティング！？

（既存の団体（体育協会など）から）スタートの頃はかなり抵抗あったんすけどね．当時体育協会って．体協はその行政の一部で，行政からお金が出てやってるでしょ，体協一生懸命やってる人たちからすると，俺たちがやってるんだからスポーツクラブなんか使わなくていいだろう．こういう抵抗が結構ありました．そんなんで我々も作戦的にそういう人たちを中心に理事にいれちゃった.（体育協会等と）重複する部分もあったんですけど，組織としての性格的な，クラブはわりといろんなことを挑戦して，事業構築してくっていう．ただ一方で，そのスポーツ協会は，スポーツ協会で役割があるんじゃないかなと思うんですけれども，そういう役割分担が明確になってるような感じなんでしょうかね．スポーツ協会長の考え方が，将来的にはスポーツ少年団を含めて，まとめ役は全部クラブの方がやるようになった方がいいっておっしゃってるような感じなので．実際にやってみると，さほど競合しな

いですよね．やってることが違うか，もしくは同じ競技であってもやってる目的が違うから，実際にはバッティングっていうのはあまり受けないかな．協会の人たちは，それぞれが自分たちがやりたい事をやってるグループですからね．それに邪魔にならなければ別にどうってことない自分たちが自分たちでやるよっていう．そんなところがあるんで．私達もその既存の活動が充実してるところにわざわざ割って入っていくようなことはないので，お互い補完し合うような関係で．

以上のように，会議録を整理すると，軽井沢町の「SC 軽井沢クラブ」が成功した大まかな要因は３つあると考えられる．

第１に，「自らがお金を生み出しながら，地域に貢献していく活動するのは，総合型地域スポーツクラブ」という決意をもって活動したことが大きく，既存団体との「棲み分け」に悩むことなく，自らのアイデンティティを自覚していた点である．

第２に，住民向けのサービス，クラブインクラブなど地元住民への健康指導を行い，健康増進活動を行っている点である（=インナー事業）．冒頭で引用した「稼ぐ力」等を考えた際，インバウンド，合宿誘致などアウター事業に傾倒しがちであるが，このような地元住民をつなぎとめる「インナー事業」に力を入れている点は有効であり，「クラブインクラブ」という「緩いサークル」には避暑としてくる在京（=都市部）の来町者も受け入れているという．

第３に，既存団体との「競合，バッティング」を避けられた点である．総合型地域スポーツクラブは，一見すると行政の教育委員会，社会体育の文脈や，既存のスポーツ協会と何がどのように違うのか，この説明には，筆者ら「MSC わっかない」も苦労する点である．しかしながら，軽井沢町では，協力的な教育長や，抵抗勢力を戦略的に仲間にするなどの交渉術が見られた．最終的には，第１の点のように志向性の違いから，棲み分けが上手くいったとのことである．

２－４．「SC 軽井沢クラブ」の財政面

クラブの黎明期　～お金のことでうち以上に困ったクラブってあんまりないんじゃないかな～

立ち上げ当初，うちはちょっと特殊な数年間ありまして，今思うとちょっとそこは正しかったり，正しくなかったりする部分もあるんですけれども，実は設立の２年目に経済産業省の「電源地域活性化事業」っていう大きな補助事業を請け負ったんですね．クラブの方で事業計画を作成したりする能力が元々なかったんで，どういう経緯でやることになったかっていうと，先ほどクラブ立ち上げのきっかけを作った【Ｚ】さんっていう，元理事の方がいらっしゃいまして，その方のネットワークに【Ｙ】大学の【Ｘ】教授っていうスポーツの世界に有名な先生がいらっしゃる．【Ｘ】先生のさらにネットワークで【Ｖ社】だったり，【Ｕ社】だったり，いろんなところがあって，その補助事業というのがコンソーシアム事業っていって，まさにいろんなところと共同体を作って，集客事業を通して地域活性をしましょうっていうそういうテーマの委託事業だったんですね．そこに応募してみないかっていうお誘いがあって，その当時私まだいなかったんですけど，当時の理事会でそれを承認して，いろんなものが前に進んだんですよ．

採択されたら，うちが当然代表団体にならなければいけなかったんですけれども，実はその手前の段階の申請手続きとか，事業計画の立案とかっていうのは全部人任せで，当然【大手シンクタンク】なんかが作成すればクオリティの高いものが出来上がりますんでね．そこで採択されたわけなんですけれども，振り返ってみれば，ああいう補助事業って，やっぱり流用できるリソースがちゃんとあって使うべきものっていうところがあるんだけれども，うちはスタートアップですよね，やっちゃったんですよね．働くスタッフも実はいろんな採択が決まってから，いろんな方に声をかけて人を集めして，【A さん】もその網にかかったスタッフの 1 人なんですよね．

それで 2005 年の結局正式な内定通知をいただいたのは 8 月頃だったんで，2005 年の 8 月から 2006 年 2 月の間に【数千万円以上】の事業を消化しなきゃいけなかったんですよ．これやっぱりスタートアップの我々にとっては結構な負担だったんですけど，でも駆け足でね，やらせていただいて，もちろんコンソーシアムで一緒に協力してくださる団体がたくさんいたので，そういうところに協力をしながら，美味しい思いをしたのは再委託のコンソーシアム団体．代表団体はあんまり何も残らない．そこでやったことは結果とて，その後中核的なメンバーになるスタッフがそこで集まってっていうところはすごく良かったし，あと短期間の間にいろいろ経験を積ましていただいたってことはすごく良かったんだけど，やっぱりちょっとそれがきっかけでいろいろ日常的にコストがかかる仕組みができ上がっちゃったんで，否が応でもその副作用もあって 2006 年からいろいろお金のことで悩む日が続いたっていう．だから多分，お金のことでうち以上に困ったクラブってあんまりないんじゃないかなっていうぐらい，非常に当初お金のことで困りました．実は逆にこれがあったから収益を稼ぐっていうところに対して，普通のクラブ以上に貪欲になれたところがありまして，今振り返るとそこも含めてよかったかなっていうところがあるんですけど．

補助金の功罪　～補助金をねだるのはよそう～

補助金，助成金ですよね．一見助かるんですけど，でもいろいろ補助金の要件を見てみると，大概は社内人件費には助成金充てられないことが多いですね．あと助成金の補助対象事業の全体収支が「クロ」のときなんかそうなんですけど，黒字が出ちゃうと，助成金額が削られるような仕組みになっちゃってるから，助成金を受ける段階でこれも利益出せないんですよね．まっとうにやればですよ．多分，創意工夫はいろいろあると思いますよね．監査も入るから注意をしなきゃいけないんだけど，創意工夫の範囲はそれなりに多少あるかと思いますけど，正攻法にやったら補助金を受ける段階で利益出せない事業になっちゃうっていうところはちゃんと理解して補助金を受ける方がいいと思います．

あとは事業収入っていうのがあるんですけど，先ほど申し上げた通り，事業収入の収益性っていうのは，各事業によってずいぶん違うんですよ．さっきやっぱり総合型地域スポーツクラブですから，地域貢献もしなくちゃいけないし，公共的なお仕事，多分半分ぐらいはやらなきゃいけないと思うんですけど，そこをバランスを間違えちゃうと，これもや

っぱりクラブの収益の足を引っ張る要因になっちゃいますから，やっぱり公益性の高い事業と収益性の高い事業を多分バランスを考えながらやっていくっていうことが，自分たちの事業の中で非常に大切な視点じゃないかなというふうに思います．あと収益事業をやる良い点っていうのはやっぱり公共的なことばっかりやってると，社員がどんどん硬くなってっちゃうんですよね．だから自分たちで自由に収益を生み出す事業を規模が小さくてもいいから，社員１人１人に意識付けをしてね，考えさせるっていうのはすごくみんなの発想の広がりがあっていいなって自分は感じてます．結果的に私達がどういう考え方でやってるかっていうとさっき言ったバランス．事業バランスを重視した経営．理念を実現するために収益事業も頑張りましょうねっていう考え方が僕はいいんじゃないかなと思います．あとソーシャルビジネスとか，社会課題解決型ビジネスっていうような言葉が最近流行りなんですけど，実はうちが創業からお世話になってる【Ｘ】先生からも最近その事言われるんです．

（以下，C さんによると）我々が初代の理事長と申し合わせたように，行政に関わってきたのは「補助金をねだるのはよそう」って，「仕事をもらおう」って．当初ね，文科省の方で１中学校区に一つの総合型スポーツクラブを作りなさいという通達が出て，それで施設等については行政の方で面倒見なさいよというのがあったんだけども，なかなか末端の教育委員会までは，なかなかその認識がね，浸透してなくて，そんなに積極的に何て言いますか，貸してくれるとか，施設を使えとかっていうようなものがなかったんですよね．そのときに初代の理事長と，とにかくお金がないから補助金欲しいわけですよ．だけど「補助金もらっちゃうと，補助金が終わったらこけちゃう」っていうことで，欲しいんだけども「補助金ねだるのはよそうと．その代わり何か仕事ください」ということで，その小さな仕事からやってきましたよね．さっき【Ａさん】から説明あったように，本当にお金に困りました．そのスポーツとは関係ない音楽イベントの事務局も受け，受け持ってその経費をね，事務局経費をいただいて，そんなこともやったこともありました．だから，一番その留意点ということの中では，自分たちがよかったなと思うのは，補助金をねだらなかったと．当時としては考えられないというか，最初は皆さん補助金頼りにそこを足がかりという考えじゃないですか．

指定管理者の苦悩　～なかなか財政の足しにはならない～

（上述のように）やっぱり設立から最初の６，７年ぐらいは非常にお金が大変でですね，借金の総額が【●●万円】を超えるぐらいのところまで１回行ったことがあります．業績もなかなか赤字のところから浮上できないっていうところがあったんですけれども，風向きが変わってきたのは 2011 年あたり風越公園全体の「指定管理」を任されるようになって，いろんなものがうまくいきだしたっていうところがあるかと思いますので，そこはまた後ほど説明したいと思います．活動内容のところなんですけれども，大きなところでいうと，風越公園の指定管理業務，指定管理業務では，なかなか財政の足しにはならないというと

ころが現実的にあって，そこの中でセットで行う「自主プログラム」ですよね，そこでいかに収益を得るかっていうところが非常に大切な要素になってくると思います．あとカーリングの関連事業，これに関してはかなり幅広くやらしていただいております．

以上のように，「お金のことでうち以上に困ったクラブってあんまりないんじゃないかな」という発言が示すように，現在は成功事例として紹介されることの多い「SC 軽井沢クラブ」であるが，設立当初は，多くの困難や苦労があったものと推察される．

特に，引用したように「設立の２年目に経済産業省の『電源地域活性化事業』っていう大きな補助事業を請け負った」ことが良くも悪くも転機の１つであった．多額の予算を消化することに苦労しながらも，そこで集まったＡさんなどの有能なスタッフが集まった点では良かったと言える．しかしながら，こうした「補助金」による制約や，「代表団体に何も残らない」という反省から，「SC 軽井沢クラブ」ではその後，大規模な補助金への応募はしていない．C さんが言うように，「補助金ねだるのはよそうと．その代わり何か仕事ください」という謙虚な姿勢で，行政や町民からの「信頼」を勝ち取ることに成功したのではないかと推察される．

また，指定管理者としての苦悩についても語ってくれた．「『指定管理』を任されるようになって，いろんなものがうまくいきだした」というメリットがあるとともに，「指定管理業務では，なかなか財政の足しにはならないというところが現実的」にあるという．指定管理業務は，総合型地域スポーツクラブの安定的，固定的な財源となる一方，税金，予算化，公共性などによる縛りもあることから前述の発言になったものと推察される．そこで「そこ（指定管理業務）の中で，セットで行う『自主プログラム』ですよね，そこでいかに収益を得るかっていうところが非常に大切な要素になってくると思います」という発言からも，「SC 軽井沢クラブ」の「稼ぐ」ことに貪欲な姿勢が読み取れる．この点は，「SC 軽井沢クラブ」と同様に指定管理業務を行っている「MSC わっかない」にとっても参考となるだろう．

２－５．「SC 軽井沢クラブ」の「稼ぐ力」

稼ぐ力　～総合型の場合は，もうマスト

どうやってお金を稼ぐかっていうのは，総合型の場合はもう「マスト」だっていうふうに僕（=A さん）は思ってるんです．実は総合型地域スポーツクラブの収入，お金を稼ぐ手段でも限られてると思うんですね．１つが会費．各費目でいいところ悪いところそれぞれあると思います．会費は用途が自由ですけど，一般的には固定費に充てられるのが多いのかなって，事務局費とかね．これのデメリットとしては，やっぱり総額がどうしてもみえてしまって，クラブの利用者から基本的には会費をもらうっていうスタンスですから，プログラムの定員で上限額って概ね見えちゃうっていうところはあんまりいいとこじゃないと思ってます．あとは協賛金，寄付金の獲得です．これはやっぱり特定の取り組み，例えば「カーリング未来プロジェクト（=本稿の 2-6. で登場）」を商品として売るってことですよね．これが協賛営業であるというふうに自分は思ってますんで，こういうものを使って特定の取り組みに対する資金提供を受けるっていうのはこれ非常に大切だと思ってます．そのた

めにやっぱり営業的なアプローチも必要だし，自分たちが提供している良さをどういうふうにお客さんにお伝えして，スポンサーしてくださる方たちに対するメリットはどこにあるのかっていうことね．明確にしてお客様にお願いすれば，それ相応の金額が集まるじゃないかな．あとは受託事業ですね．民間から受託するケースもあれば，行政から受託するケースもあります．残念ながらどこの自治体も一緒かどうかわかりませんけど，その行政の見積額って結構シビアですよね．管理商品を右から左だし人件費の見積もりどの程度やってもらえるかっていうところでいくと各都道府県の最低賃金に近いぐらいの見積もりなんですよ．残念ながら．

だから非常にお仕事としてありがたいし，人件費の一部に充当はできるんだけど，基本的に薄利だと思って受けなきゃいけないんじゃないかなと思います．それでやっぱり見積もりを出すときの見積もりの仕方がすごく大事ですから，目に見える経費とね．やっぱり固定費ってなかなか見えづらい経費がいろいろあるんですよね．だからそういうものをきちんと見積もり書に反映して，仕事をやってむしろ困ったってならないような，正しい見積もりを作るところがすごく大切じゃないかなと．

指定管理者としての工夫　～「外来者」をターゲットに～

指定管理の仕事は軽井沢町振興公社っていうところと共同体でやらせていただいてるんですけれども，カーリングの方に関しては，実質的には私ども（=「SC 軽井沢クラブ」）がイニシアティブをとらしていただいて，いろいろなものを展開させています．指定管理の仕事だけ粛々やっても，クラブには何も残らないですよね．入ってきたお金が出ていくだけですから．ですからその中でやっぱりクラブに残る価値を作らなきゃいけないっていうことで，いろいろターゲットを決めていくつかのプログラムを作るっていうところを一生懸命やってまいりました. これは育成とか普及のところに関わってきますけども,【子どもたち】のカーリング指導ですね．それは地域のカーラーを増やしたり，非常に地道な取り組みだと思っています．これもうちょっと遊び要素が入った．そうですね．サークル活動の中で実はカーリングもございまして，そこに来てくださってる方たちですね．これ軽井沢の場合「外来」のお客様が非常に多いので，そういう方たちに向けた「カーリング体験プログラム」っていうところが非常に力を入れております．カーリング施設，他施設と違って，初めての方がいきなり来て施設利用するっていうことは非常に危険ですので，皆様にご理解をいただいて，必ずあの体験プログラム１回受けていただいた上で，ご利用いただくっていうことをやらしていただいております．60 分，90 分，あとリピート向けのプログラムを準備しまして，お１人いくらっていう形でお金をいただいております．

夏休み，ゴールデンウィークになると非常に良い大盛況ですね．あとは企業向けのプログラムっていうのがありまして，これあのカーリングを教えるっていうところにはあまり重きを置いてなくて，氷の上でストーンを使って楽しみながら「チームビルディング」の要素を入れてあげるっていう，そんなプログラムになってまして，これが今ちょっとコロナのあと客足鈍ってはいるんですけれども，2019 年まで非常に利用者が多くてお客さん

を見てみると，日本の老舗企業よりかは外資系ですとか，あと IT 系とか，あとベンチャー企業ですよね，こういった方たちの利用が非常に多くて私達が想定外に伸びたってそんなプログラムですね．会社さん，一番多いときに 200 人ぐらいあったという．いろいろ創意工夫しましてね，シートの真ん中からデリバリーできるようにちょっと再考しまして，シート数は 6 シートなんだけど，12 グループで研修を受けられるようにして，それで 200 人という人数を捌いて，実施したこともございます．

スポンサー集め　～スポンサーのメリットを作りこんであげる～

クラブチームの運営は，クラブの自己財源だけではとてもじゃないけどやりきれないんです．ですから，私達が営業活動を行ってですね，スポンサーさんからお金を集めるっていうところで，クラブが，クラブチームに対して支援を行う，そういう形をとらせていた．これはオリンピックから帰ってきたときに，街中のカーリングの応援機運を高めるためのカーリングサポーターズクラブっていうのを実験的に作ったんですけども，そこを使って声掛けをして集まってくださった皆様です．さすがにオリンピックに出るといろんなものが盛り上がるなっていうことを実感させていただきました．あとはオリンピックチームを育てたことが，毎日，新聞から表彰されました．

企業さんが求めるのは，この事業を通して企業の露出がどれだけ増えるかっていうと，あとこの事業をスポンサードしていることによって社会的なイメージがどれだけ向上するか，僕はその 2 点に尽きるんじゃないかなっていう部分ですよね．ですから，そこを実際にこれ資料抜粋してましてね，スポンサーメリット，スポンサーのカテゴリーごとにスポンサーにこちらが入った資料とかっていうのが実際に入ってるんですけど，そこをやっぱり作り込んであげるっていうところですよね．

＜それは企業にとってこういうメリットがあるっていうのはあからさまに見せるのでしょうか？＞もちろんです．あと最近企業さんと話してて多いのは，せっかくカーリング競技を応援してるんだから，社員全員でカーリングを応援することで，会社の中の一体感を高めたいなって思ってる会社さんが結構増えてきてるように思うんですよね．ですから，それに関しては，例えば社内プロモーションをどうやったらいいかっていうところ，企業さんと一緒に話し合って解決してあげるとか，そういった取り組みも重要だと思います．あと，ファン感謝イベントみたいなところに協賛者さんの社員もお呼びして，一緒にやりますのでね，そういったところで会社の中，応援機運を盛り上げる助けてあげたりとか，そういったところじゃないかなって自分は思ってます．

トップアスリートの雇用

クラブチームの新しいあり方を考えたときに，うちがクラブチームの運営はするんだけど，雇用のサポートは複数企業にやってもらうのが理想じゃないかなって自分たちは考えてて，もちろんうちのクラブで全員雇うことって多分経営的には難しいので，そこの部分を特定の企業に負担が集中しないようにね．複数の会社に助けていただくっていうのは多

分理想じゃないかなと思います．今まで社数でいうと，もうほとんど未来プロジェクトのスポンサーに入ってる会社なんですけど，6 社とか，7 社とかそれぐらい，今もう雇用されてない会社も含めると，それぐらいの会社には雇用でご協力いただいてる．ただ各社さんによってアスリート雇用の条件ってやっぱり結構経営事情が違うから，バラバラなんですね．だからその自由にさせていただく時間がやっぱり会社ごとにちょっと違ってしまったりとか，あと雇用条件ですね．年 7 割ぐらいしか働かないんだったら給料 70%ですけど，30%は出しませんよっていう会社もあるし．多分企業の経営状態とか規模とか，それによってサポートの形はまちまちだと思ってます．その企業からのサポートプラスクラブからも一部支援をするみたいなパターンは．トップチームに関しては競技活動のところにお金を出してますから．

上述のように，「どうやってお金を稼ぐかっていうのは，総合型の場合はもう『マスト』だっていうふうに僕は思ってるんです」という発言からも見て取れるように，公共性を担保しつつも，「事業体」としての総合型スポーツクラブであることが強く読み取れる．A さんによると，クラブの収入源は，「１つが会費（＝次節で提示するように「SC 軽井沢クラブ」では一般的な総合型地域スポーツクラブで見られる「会員制」を設けていない．そのため会員制の年会費，月会費という意味はない）」であり，もう１つは「協賛金，寄付金の獲得」であるという．「SC 軽井沢クラブ」では，「スポンサー集め」に奔走し，クラブのスポンサーや，トップアスリート雇用の一部経費負担をお願いするなど地道な営業活動を行っていることが推察される．そこには，「スポンサーのメリットを作りこんであげられる」ような，A さんのように高い営業スキルを持った有能な構成員がいる点にも注目すべきである．

また，「SC 軽井沢クラブ」の一番の特徴ともいえる点が，本節で提示した「稼ぐ」仕組みである．そこには，前節でみたように「指定管理業務では，なかなか財政の足しにはならないというところが現実的」という反省に立脚したことで，「やっぱりクラブに残る価値を作らなきゃいけないっていうことで，いろいろターゲットを決めていくつかのプログラムを作る」というアイデアが誕生したものと考えられる．その中でもカーリングにおいては，「外来者（＝軽井沢の外からくる県外の人，避暑で訪れる人などを指す）」をターゲットにすることで，利益を確保しているという．また，最近では誰もが知る有名企業の社員研修など「チームビルディング」の一環としても活用され，「外来者」から利益を得ることに成功しているという．これらの成功の要因の１つは，軽井沢ブランド，「避暑地」として，東京からの物理的なアクセスの良さや，巨大経済圏との近さ，富裕層の存在などいくつか恵まれた前提条件があることは否定できない．しかしながら，そのブランド力に奢ることなく思案し続けている点は，「MSC わっかない」の理事たちにとっても参考となるはずである．

２－６．「SC 軽井沢クラブ」の「会員」

クラブの会員　～会員制っていうのは，ほとんど有名無実～

会員制っていうのは，ほとんど今有名無実で積極的にやってないんです．やっぱり理由があって，会員さんが溜まれる場所がない，ていうところもあるし，あとお客様のプログラムの利用状況を見ると，複数にまたがって利用されてるお客さん，本当にわずかなんで

すよね．そんな中で会費取ったところで「会員メリットどこに出したらいいんだろう」っていうことをちょっと僕らも考えざるを得ない．それともう一つは，なんていうのかな．拘束的な人の塊を，40 代ぐらいから下の方はあんまり好まなくなってきてる感じがしてて，例えば今【担当者】がやってるフットサルの授業の中で「個サル」っていうのがあって，これ毎回バラバラな人たちが集まってチーム組んで，フットサルの試合は遊びの延長でやりましょうねっていうそういう集まりなんですけど，そういうところの需要が逆にすごく多いんですよね．だからちょっとメンバーシップ，メンバーシップって我々考えがちなんだけど，ちょっとそれに対してもどの程度本当に需要があるのかちょっと読みづらくなってきたっていうところがあって，会員制は今後，金輪際やらないってことじゃなくて，必要性を感じたタイミングで，例えば建物が出来て，溜まれる拠点ができて，「会員になるメリット謳えるじゃない」ってなったときにやるかもしれないんだけど，今大急ぎでやろうとは思ってないですね．

会員制をやることによって利用者が爆発的に増えるんであれば，それはもう躊躇なく，やった方がいいと思いますよね．順番としてはどっちからっていうのはあるんですけど，あんまりいい形にこだわらず，とにかく利用者を増やす取り組みを頑張ってみて，必要性があれば改善してみるっていう，順番の考え方の方が僕たちもやってみて，今はいいなっていう風に思いますね．後，もう 1 つ会員制にしちゃうと，そこにかかる事務局の手間が馬鹿にならないっていうのが．わずかな会費もらって本当に費用対効果あるかなっていうところをね，ちょっと考えた方がいいかもしれないですね．

以上のように，「会員制っていうのは，ほとんど今有名無実で積極的にやってないんです」という発言は，「会員を集め，その会費をもとに会員サービスをする」という「一般的・常識的な総合型地域スポーツクラブ」の考え方とは，(良い意味で) 一線を画すものである．この発言の裏には，苦労を乗り越えた組織，地道な営業活動，指定管理業務による安定性，「外来者」によって「稼ぐ」ことができている「SC 軽井沢クラブ」の「自信」の一端と考えられる．

同時に A さんが言うように，「会員制にしちゃうと，そこにかかる事務局の手間が馬鹿にならないっていうのが．わずかな会費もらって本当に費用対効果あるかなっていうところをね，ちょっと考えた方がいいかもしれない」という問題提起は，「一般的，常識的な総合型地域スポーツクラブ」を経営している団体にとっても貴重な示唆となりえるだろう．

２－７．「SC 軽井沢クラブ」の「カーリング未来プロジェクト」

(B さんの配布資料を見ながらの説明によると) SC 軽井沢は，NPO としては以前から活動していたんですが，カーリングチームに特化したクラブとしては 2005 年にスタートしまして，選手が順次職員になったり，他の協賛企業とか，そういったところで選手がお世話になりながら，まず男子チームの方が活動をしていきました．そっから少し飛ぶんですけど，2018 年に発足から 13 年ほどかけて，オリンピックに出場というところになりまして，その間にですね，その男子チームだけではなくて，少しずつ競技全体，ジュニアチームだったり

とか，そういったところに広げていくというところで，2015 年にこの「カーリング未来プロジェクト」というのがスタートしまして，こちらでジュニア選手だったりとか，トップまで循環して育てていくというような構想が少しずつ始まっていきまして，プロジェクトとしては 2015 年に始まったんですけど，実際に選手を受け入れて稼働してきたっていうのが 2016 年になりまして，「カーリング未来プロジェクト」とは別にですね，SC 軽井沢クラブの方で，競技団体とは，請け負うというか，協力するような形でスポーツ少年団をまず最初に．これ以前にやってまして，その中でやっぱり有望な選手というのが出てきてましたので，その選手たちを，より競技に集中というか，特化するようなところで「エリートアカデミー」というスクールのようなところを 2016 年にスタートしまして，女子のチームが 2 チームですね．昨年度の 2022 年の「世界ジュニアカーリング選手権」で優勝したメンバー，コアメンバーになってくる選手なんですが，このあたりでスタートしたものを今，引き継ぎながら，やっているというような状況になってます．近年ですと，先ほど話した世界ジュニアの優勝もあるんですけど，その前年もですね，世界ジュニア選手権に女子チームがあって出場したり，男子チームも，3 年前からジュニアの「エリートアカデミー」の方で活動してまして，最初は女子だけの「エリートアカデミー」だったんですけど，順次男子も入れながら，またその男子の「エリートアカデミー」の選手が今，トップチームの SC 男子の 4 名のうち 2 名がエリートアカデミー出身の選手というふうになっております．

簡単な沿革なんですけど，またちょっと最初の方に戻らせてもらいまして，4 ページのところにミッションというのがあるんですけど，カーリングの未来プロジェクトというのは元々スタートとしては男子のトップチームのシーンから始まったんですが，やはり開始当時どうしてもですね，チームの動きというのが，4 名でチーム活動するので，やはり選手の移動とか簡単に崩れてしまうというか，なかなか継続性が難しいというようなところもありますので，やはりクラブとしては継続的にチーム運営だとかクラブ運営をしていくというようなところで，右下の図にありますようにジュニアの世代とか，一般のカテゴリからトップまでクラブで，階層的に育てていくという中で，さらにトップ選手がジュニアとか，地域の選手を指導するというようなところを目指して，今完全に出来上がっているというようなところではないんですけど，トップへから地域スポーツまで，循環してやっていきたいというところを目指してやっております．

それで現在，表 5 ページの方にあります，メンバーの方は昨年度のものなんですが構成としては同じような形で，男子のチームがありまして，女子チームが昨年時点では 2 チームあったんですが，現在は女子の一般チームが 1 チームとそれから今年はですねちょっと競技団体の強化の関係で，この右側にありますジュニアと書いてあるメンバーがそれぞれユニバーシティゲームズの代表と，あと 21 歳以下のジュニアの代表と 2 名ずつでわかれるような形になってまして，ちょっと活動が現在はこのジュニアに関しては個別というようなところになっておりまして，やはり SC 軽井沢クラブは長野県だったりとか，日本カーリング協会の直接の参加団体というよりは，民間のクラブへなってきますのでそういっ

た，日本カーリング協会を主たる競技団体の意向に合わせるような形で活動していくというような状況になっております.

アカデミー生として今年は 13 名おりまして，去年よりも少し増えております．コーチ陣としては変わらずに 4 名のスタッフがいるんですが，これはコアなコーチ陣ということで載せているんですが，指導のスタッフとしてはですね，このコアなコーチメンバーとは別にトップ選手，男子チームだったり女子チームだったり，にアカデミー生を指導してもらったりとか，それからそれぞれの選手に助言だったりね，アドバイスをするようなことをできるようなことを今準備をしながら少しずつやっている形で，どうしても選手全部含めると 20 名以上の選手になりますのでコーチだけで生きるというのは難しいところもありますので将来的な選手の，指導に当たるとか，そんなところも見据えて選手にも指導の方に携わってもらうというようなことも少しずつやっております.

それから事業の内容として 6 ページ目にありますように，大きく三つの柱でやらせていただいておりまして，1 つは，男子のトップチームを始めとする強化事業，それから育成事業ということで，トップチームよりも少しグレードが下がるようなところで，カーリングの場合は 21 歳以下からジュニアカテゴリーということになるんですけど，その 21 歳以下の選手たちが入ったエリートアカデミーというのはスクール形式でやっておりまして，そちらで次世代のアスリートを育成するというようなことをしております．それから普及ということで強化，育成以外にも地域の選手をサポートするようなところもこちらそこまで大きくやっているわけではないんですが，活動の一環としてやっております．それぞれ簡単に説明させてもらえればと思いますが，7 ページ目の方に強化について触れておりますが，どうしてもカーリングの競技団体，軽井沢だと軽井沢カーリングクラブというのが主体になって，強化だったりとか育成もやってるんですが，どうしてもカーリング，氷上練習特化していってしまうところが多いんですが，クラブとしては，先ほどの事業説明であったようにフィジカルトレーナーがいたりですとかその他，関係の機関ともスポンサーとかも含めてですね，医療機関だったりとかいろいろなところもありますので，氷上以外のところでもフィジカルトレーニングをしたり，それから座学なんかを中心とした戦略ですとか，いろいろなサポートをトータルで行っているというようなことになります.

2 番目の事業として 8 ページ目であります，エリートカーリングアカデミーを中心として，次世代の選手を育成するということとともにですけど，指導者の育成の方も少しずつ力を入れているということで，地域のカーリング選手にクラブの指導者としてやってもらうというようなところで一緒に指導方法を共有しながら，アカデミー選手を教えていくというようなことをやっております．今まだこちらに表記しているクラブの認定のコーチ制度というのは完全に出来上がってはないんですが，指導のメソッドというものをコーチ陣で共有して，なるべくベースのところは均一的な指導ができるようにというようなことを目指してやっております．それから左下の方にですね，これまでのカーリングエリートアカデミーの選手たちの進路についても書いてあるんですが，今，女子の選手の説明を当初にしたんですが，そちらでやっている選手の多くが【T社】のところで採用していただい

て選手活動しているというようなところと，アカデミーの出身者で【Ｓ社】の所へ行っている選手というのが出てきております．2016 年からの活動の中でも比較的カーリングのトップチームの方へ受け入れていただいている選手が多くいるということになっております．

それから 3 番目の事業として 9 ページ目の方に普及としてあるんですが，ジュニア世代の大会を開催しております．それからアドバンスカップということで，ちょっと今年はコロナとかもあって実施はしてないんですが，昨年も少し規模を 1 日開催というようなところで，ジュニアだったりとか一般の世代なんかを対象とした，オープン大会に近いような形の大会も実施しております．

それからワンデイキャンプということで，日頃，エリートアカデミーなんかでやっているような内容を広く一般の競技者にも共有するような形で，キャンプを開きたいというようなことをしております．それからクラブの交流イベントとして日頃支援していただいている皆さんをお招きして，昨年までですとやはりコロナの影響でオンラインのイベントなんかに切り替えて実施することが多いんですが，交流イベントをやったりとかそのコロナ以前ですと，協賛者，支援者の方の体験教室というようなことを使って一緒に交流するというようなことをやっております．

以上のように，B さんによる「カーリング未来プロジェクト」の説明をすべて提示した．本プロジェクトは，①選手強化，育成事業，②指導者育成，③大会の実施，④体験事業（ワンデイキャンプ）の 4 つに大別される．①については，「エリートアカデミー」を創設し，現在の主力選手の育成へとつなげていった点からも，この仕組みづくりが有用であったことは疑いようがない．冒頭にも記載したように 2024 年 2 月の日本カーリング選手権において，「SC 軽井沢クラブ」の女子チームが初優勝した．さらに，エリートアカデミー出身者が MVP を獲得するなど大活躍したことは「カーリング未来プロジェクト」の成果の 1 つといっても差し支えないだろう．また医療機関，フィジカルトレーニングなどカーリング以外のノウハウを取り入れたことも大きいものと推察される．②では，地域の指導者と「指導方法の共有」を行い，一貫指導体制を構築した点は有益である．周知の事実としてサッカーの有名クラブチームなどにおいても，このような方法が採用されている．③，④については，新規のエリートアカデミー入会者，未来プロジェクトの周知につながることが期待され，協賛，支援者を包摂しながら実施している点も注目すべき点である．

２－８．「SC 軽井沢クラブ」による学校との連携

＜①SC 軽井沢クラブさんが小，中，高とどういう連携をしてるのか．②2023 年から始まる「部活動の地域移行」を見据えて何か取り組んでいることがあるのか？＞

学校との関わりは，まだ必ずしも「面」の取り組みにはなってないんですけど．個別で言うと，例えば軽井沢中学校のバスケット部の外部指導 1 年だけ，やらしていただいたり，軽井沢の場合はなんていうのかな，部活動の延長の時間帯に関しては，保護者会の判断でいろんなことに決まってるんで，残念ながら 1 年間で終わっちゃったんですけど，そこに

協力させていただいたりとか．あと軽井沢中学校にカーリング部っていうのが長らくなかったんですけど，そこはうちが単体でっていうことじゃなくて，カーリング活性化プロジェクトっていう委員会を 2010 年からずっとやってて，これはカーリングの関連団体，軽井沢カーリングクラブとかね，長野県カーリング協会とか，あと SC とかね，あと行政とかいろいろあるんですけど．実はそれぞれが取り組んでる内容の中からこぼれちゃうことが結構あるんですよね．そういったところをきちんとフォローアップしていこうということで，寄り合いの委員会作ってやってきてるわけですけど，そんな中で軽井沢中学校のカーリング部を復活させて，今もう退職しちゃったんですけど，当時うちの職員だった方を指導者として任用していただいた．今スピードスケートクラブっていうのはクラブチームでやらしてもらってるんですけど，氷上スポーツの部がやっぱり中学校高校であったんですけど，やっぱり段々段々，生徒の数が増えたから，先生の配属数も減らされて，しかも氷上種目の指導できる方っていうのは限られてるから，いつかは多分中学校からなくなっちゃうだろうっていうことは，当時中学校の顧問をされてる先生からずっと言われてて，実はうちのクラブチーム，最初は小学校生だけを対象に行ってたんですけど，中学校の先生からは，いずれ多分部活指導を中学校でできなくなっちゃうから，そうなったときに任せるよっていうことを言われてて，今いろいろ紆余曲折あって軽井沢中学校スケート部なくなっちゃったんですよね，入る子少なくなっちゃったから，でもやりたい子が全然いないわけではないので，そういった子どもたちがフォローもスピードスケートクラブでやらしていただいております．小学校はそこだけですね，スケートクラブだけですね．あと高校は同じく活性化プロジェクトの中で，カーリングのサークル活動，まだ部まで行ってないんですけど．そういうものを作る契機を活性化の方で作らしてもらって，やっぱり指導者，一応うちのクラブからじゃなくて軽井沢カーリングクラブからっていう体にはなってますけど，実質うちのスタッフがやらしていただいています．大体そんなとこです．

あと地域移行に関しては，これやっぱり結構，長野県の中でも 5 年ぐらい前から話題になってて，長野県は部活動の活動指針っていうのをもう 2012 年ぐらいに出して，朝の部活やめようとかね．あとやっぱり部活動の中でやっぱり教師の過重労働が改善していきましょうとか，結構全国に先駆けて指針出したそういう県ですね．どこの自治体もそうなんですけど，文科省から中期目標出てはいだけど，どこの自治体もまだ多分はじめの一歩出せないところがほとんどなんですね．先だって部活動，地域移行の検討委員会を作りましょうということをうちの方から行政に提案させていただいて，もちろん学校の了解を得ながら，教育委員会と総合政策課っていう話を持ってって．先月，検討委員会のための準備会を行って，検討委員会の設立がそこで決まったっていう，そういう段階です．12 月から 2 ヶ月に一遍の頻度で検討委員会を行っていこうかと思ってます．自分の考えは慎重にやっていきたいと思ってて，これは何でかっていうと，表面上は部活動の地域移行は先生方の過重労働を軽減するためにあるんですけれども，実はそれ以外にもいろいろ問題があって，まず子どもたちの部活動の実施率が落ちてる．これいろいろ文科省のアンケートなんかを見ると，どうも部活動の活動内容と生徒さんが求めるものが段々ミスマッチが大きく

なってきちゃってね，部活動に入る子たちがいなくなっちゃってるとか，今の子どもたちって小学校のときに校庭で遊ぶっていうとあまり経験しない子が増えてきちゃったから，昔僕らの頃だったら，遊びを通じてね，隣のクラスとソフトボールの試合をしようとかね，サッカーの試合をしようとか，何かスポーツのベースみたいなものが自然にあって中学校で競技スポーツの方っていうような形な自然に流れてたんだけど，今の子たちはそういう経験飛び越えて，いきなり県大目指して頑張ろうなんて世界に連れてかれちゃうでしょう．それに対してやっぱり面白くないなって感じる子どうしてもいるわけですよね．だからそういうことも考えながら部活動そのもののあり方，でもっと拡大すれば中学校の中学生の課外活動がどういうものがいいだろうねっていうようなところから，もう１回，やっぱり協議をやり直してね，そこでどういうものを作るかっていうのを考えてみる必要があると思ってて，そういう提案するとね，やっぱりいろいろ意見が出ちゃうと思うんですよ．やっぱり競技スポーツでずっとやってきた方なんかは多分何言ってるんだっていうような，こういう当然出ると思うから，だから賛否がわかれるテーマがたくさん含まれてるからこそ，丁寧に皆さんの意見を汲み取りながらやりたいなと思ってます．一応，あんまり偉そうなこと言えるわけじゃないんですけど，うちのクラブがコーディネーター役で，これは進めていきたいっていう今のクラブの立ち位置ですね．

以上のように，軽井沢の中学校の部活動は，「保護者会」が主催するものであり．稚内市を始めとする他地区，他県の学校とはそもそもの前提が異なる部分が見られる．その上で，「カーリング活性化プロジェクト委員会」のような「寄り合いの委員会」を作り，行政，民間，競技団体が連携する仕組みを作るなど「風通しのよい」関係性づくりに尽力している様子がうかがえる．

部活動の地域移行に関しては，教育界において先進的な取り組みを行ってきた長野県においても，A さんは「慎重にやっていきたい」と考えているようである．「賛否がわかれるテーマがたくさん含まれてるからこそ，丁寧に皆さんの意見を汲み取りながらやりたいなと思ってます」，「うちのクラブがコーディネーター役で，これは進めていきたいっていう今のクラブの立ち位置」という姿勢からも，対話的に議論を進めていこうとする姿勢が読み取れる（この調査は 2022 年 10 月時点のものであるため，その後の時系列についてはは追加調査等が必要である）．

２－８．SC 軽井沢クラブの未来　～競技者を作ることだとは思っていない～

（A さんによると）部活動の話も関わるんですけど．「僕らの主軸は競技者を作ることだと思ってない」んです．どちらかっていうとやっぱり文部省（＝正確には文科省）の考え方もそうなんですけども，生涯スポーツの部分，生涯スポーツって言葉がいいのかちょっとよくわかんないんですけど，やっぱりもっともっとね，「スポーツの根源的な楽しさを１人でも多くの人たちに伝えて，活動に参加してもらう」っていうのが僕たちの根本的なところだと思ってるんで，競技スポーツのところをたくさん，一生懸命やろうって思ってないですよね．だからカーリングが特別だし，軽井沢は氷上スポーツが，特色があるから，ひょっとしたら将来，アイスホッケーとかね，フィギュアスケートとかそういったところに関して言う

と，競技者育成ってとこに進んでいく可能性はあるのかもしれないけど，フルラインでそれをやろうとは全く思ってないですね.やっぱりベースは「生涯スポーツの部分のレーン」をしっかりと作っていって，結果トップ選手，だからある競技種目の中でそういう機運が盛り上がってきちゃうだったらいいと思うんすよ．育成とか，その普及のところで活動機会を増やして，たまたま，この競技種目は競技志向のところが機運が高まっていくんだったら，そこは新しい機会を大人たちが与えてあげればすごくいいと思うんだけど，もう先にトップチームを目指すような器をどんどん作って，そこに子どもたちを参加させるっていうやり方はあまり考えてないですね.

(C さんによると)【A さん】もさっき言ったように，当初のね，貧弱な，財政的に本当に大変な時期から携わっていろいろ苦労してると思うんで，参考になることもあるんじゃないかと思いますけど．まだまだ私ども発展途上中でありますので，いろいろまた皆さんからね，勉強していかなきゃいけないところがあると思うんですけども，さっきちょっと話題に出たやっぱり学校のクラブ活動のね，「地域移行」というようなものの中では，やっぱり我々が果たしていかなきゃならないだろうという自覚は持ってますし．そうかと言ってこれボランティアだけじゃとてもできませんのでね．行政がその点をどのくらい目を開けるか．そういうものがなければちょっとできないですね．やっぱりご父兄の皆さんにもその受益者負担ということもきちんと理解してもらわないと，今までの学校スポーツみたいに何でもただでできると思うとも行かないしね．だからそういうところにいろいろまだこれから課題があると思うんですけども，この総合型のスポーツクラブの役割っていうのは，日本中大変大きなものがあると思います．さっき話題に出たようにスポーツ，今の子どもたちがスポーツ離れしてますよね．やっぱりスポーツっていうとつらい，苦しい，汚いっていう，そういう話になって．この軽井沢でもやっぱり冬場のスポーツ大変だったから，その小学生なんか全部スピードスケートやったんですよね．入学すると，それで少しやってくると，親がもうむきになって，その馬を一生懸命尻を叩くわけですよ．そうするとね，やっぱりもう小学校いっぱいやったらもう嫌になっちゃうんですよ．それで小学校終わるときに中学校行って，スピードスケートやろうなんてのは，ほんの一握り．よっぽど能力のある子でないとね．ましてや高校では．そういうふうに懲りちゃうんですよね．あんまり，そのやると，だからやっぱり本来ってそうじゃなくて，楽しめるスポーツって生涯的に楽しめるもんだよ，というのがこのクラブができた一番最初の考えなんですよね．楽しいものでしょ．そういうような普及ができないだろうかっていうことですよね．そうじゃなきゃね，なんて何でもやっぱり，だからさっき【A さん】から説明があったけど，競技スポーツを目指してませんっていう，そういうところなんですよね.

以上のように，「競技者を作ることだと思ってないんです」というインパクトのある発言から始まったＡさんの語りであるが，その真意は「生涯スポーツのレーン」をベースとしてしっかりと作り，「『スポーツって生涯的に楽しめるもんだよ』というのがこのクラブができた一番最初の考えなんですよね」

という．そのため「先にトップチームを目指すような器をどんどん作って，そこに子どもたちを参加させるっていうやり方はあまり考えてない」というように，クラブの名声や，クラブを有名にすることではなく，地道な「生涯スポーツ」としての延長線上に競技スポーツがあることを意識した発言であろう．C さんもオリンピック選手，世界ジュニアカーリング選手権の金メダリストなど次々に優秀なカーラーを輩出しても，依然として根底には「生涯スポーツ」としての「SC 軽井沢クラブ」という揺るがない信念があるものと推察される．

おわりに

本稿の目的は，「SC 軽井沢クラブ」の選手育成，住民への生涯スポーツ機会の提供，クラブ経営などの問いを念頭に置きながら，現地視察の際に実施された説明や，その後の質疑応答による会議録をもとに，今後の「MSC わっかない」の方向性を検討するための基礎資料とすることであった．

今では多くの著名な研究者らによって，「成功事例」の１つとして紹介されることも多い「SC 軽井沢クラブ」ではあるが，その立ち上げ当初の苦労，補助金との向き合い方，「稼ぐ」ための仕組みづくりなど，彼・彼女らによる様々な実践の苦労が会議の中で話された．その中でも，本稿における結論として，3 つ挙げる．

第１に，「カーリング未来プロジェクト」による取り組みである．同プロジェクトの概要は，著作権の関係上，本稿に掲載することはできないものの，説明の際に用いられた全 17 ページにわたるプレゼン資料となっている．これらは，企業への協賛金集め，事業の説明などに活用しているという．

また，選手強化という視点では，「カーリング未来プロジェクト」に位置付けられた「エリートアカデミー」の創設が大きい．同エリートアカデミーのような仕組みは，サッカーなどでも実施されているように，ユース制を敷き，その後トップチームへと選手を供給していくものである．現在，このようなジュニアからトップへと「一貫指導体制」を構築しているカーリングチームは，日本国内には，ほとんど見られない．このようにきちんと可視化されたプロジェクトを構築し，さらに選手育成にもつなげている「SC 軽井沢クラブ」の指導体制は，「MSC わっかない」においても参考にするべき点が多いと考えられる．

第２に，「総合型地域スポーツクラブ」界の一般常識にこだわらない姿勢である．前章でも記載したように，「SC 軽井沢クラブ」は，多くの総合型地域スポーツクラブで言われる「補助金の受託」，「会員，会費を集めること」や，「競技者を作ること」とは一定の距離を置いている．あくまで主眼は，「楽しめるスポーツ」，「生涯スポーツ」による「インナー」の充実であり，その延長線上にトップアスリートを位置付けている．この背景には「SC 軽井沢クラブ」自身の「自戒の念」ともいうべき，失敗や，苦労をバネに，「SC 軽井沢クラブの本来の目的」を常に見失わなかったスタッフ，経営陣による「学び」があったことは言うまでもない．また，他市町村でよく言われる「既存のスポーツ団体」との軋轢がほとんど生まれていない点も，同クラブの目的，方向性がしっかりと定まっていることの証左と言えるのではないだろうか．

前述のように一貫して自分たちの方向性を大きく見失わなかった背景には，アドバイザーとして実践にコミットしていた【X】教授らのような「大学の『知』」による存在，助言も大きかったと考えられる．クラブのスタッフらが，【X】教授を通して第３者的な視点や，他地域の事例から，常に学び続

けられる環境が用意されていた点も見過ごすことができないポイントである．このような学際的な風土が生まれやすい点も軽井沢の魅力であり，宣教師自体から異文化に触れ，現在は東京からのアクセスの良さ，著名な大学の「研修所」や，「セミナーハウス」などが数多く存在する「学際都市」兼「避暑地」としてのブランドを利用できたのではないかと考えられる．

第 3 に，「稼ぐ」ことへ貪欲になる姿勢である．この点については前述の原田，間野も評価しており，「SC 軽井沢クラブ」が成功事例として評価されている点である．しかしながら，始めから「成功」していたのではなく，彼・彼女らの違和感，失敗をもとに，現在の「成功」があると考えられる．一見すると「SC 軽井沢クラブ」の成功は，「軽井沢ブランドゆえ成功した」と考えられがちであるが，自分たちの実践から出た「問い」を１つずつ解決，可視化していったことで現在の姿になっているのであろう．例えば，「指定管理業務はなかなか財政の足しにならない」，「補助金に頼るのはよそう」といった「稼ぐ」ことへ貪欲になれたのは，自分たちの実践からの「学び」であった．そこから，総合型地域スポーツクラブは，「2-3.」で提示した下記のような考え方にたどり着いたものと推察される．

> 総合型地域スポーツクラブって私の捉え方は，公共的な任務も負ってはいるんだけど，やっぱりスポーツ協会とか，スポーツ推進審議会とは根本的に違う，そういう存在だというふうに思ってます．一番の違いは，行政のお金で公共的なことをやる．そういうところではなくて，もちろんそこも含まれるんですけど，自らがお金を生み出しながら，地域に貢献していく活動するのは，総合型地域スポーツクラブと思ってまして･･･．

会議の序盤にでた A さんの言葉であるが，終始一貫，このような「総合型地域スポーツクラブ」としての存在意義を自問自答し続けた彼・彼女らの姿勢が，凝縮されているように推察される．そして前章で提示したように，その根底には「競技者」を作ることではなく住民への「生涯スポーツ」機会の提供としての「SC 軽井沢クラブ」という揺るがない信念も推察される．

以上のように「SC 軽井沢クラブ」は，「通年型カーリング場」を有し，全国屈指のブランド力，マーケティングなどのクラブの人材，特徴を生かしながら，カーリング選手の強化へとつなげていった姿勢が読み取れた．一方の稚内市にある「MSC わっかない」は，2022 年 4 月に（実際の会員募集は 2022 年 10 月）手探りの中，その活動をスタートさせたばかりである．現在は，稚内らしさを生かしながら地道に活動を進めている．「SC 軽井沢クラブ」のように下部組織からオリンピック選手や，全国，世界的に活躍する選手は，現時点ではまだ現れていない．しかしながら，稚内市の小，中学生や大学生が予選を勝ち抜き全道大会，全国大会に出場するなど選手育成の下地は徐々に作られつつある．そのため「SC 軽井沢クラブ」視察が「MSC わっかない」にとって更なる刺激になるものと考えられる．

末筆に本稿の限界と，今後の展望について述べたい．最初に本稿の限界についてである．本稿は，稚内市の総合型地域スポーツクラブの実践にコミットし，その一連の動きを時系列に，即時的にまとめたものである．そのため関係者へのインタビュー調査などは，今後実施する予定である．

今後の展望は 2 つある．第 1 に，「他地域における調査」の実施である．特に北海道北見市常呂町では長きにわたり継続的な選手強化が進み，国内トップクラスの選手，オリンピック選手を多数輩出している．そのため「カーリングのまち」，「カーリングの聖地」などと呼ばれることも少なくない．

日本のカーリング界を長きにわたり牽引してきた「ロコ・ソラーレ」や，新設された男子の「ロコソラーレ（=ロコ・ドラーゴ）」など現在も多くの選手が国内トップレベルである．同市における調査は，今後の筆者にとっての課題である．

第２に，「部活動の地域移行」の検討である．本稿でも触れたが「部活動の地域移行」が，日本の各地で可及的速やかに行われるべき課題の１つとなっている．学校現場における調査や，他地域との比較など，現代的な話題を即時的にまとめ，より学際的な議論が必要になると考えられる．また，本稿において事例とした軽井沢町における「部活動の地域移行」がどのようになったのか，その経緯も検討したい課題の１つである．

●参考文献

原田宗彦，2020,『スポーツ地域マネジメント～持続可能なまちづくりに向けた課題と戦略～』，学芸出版社，京都.

軽井沢町，https://www.town.karuizawa.lg.jp/www/index.html（閲覧日：2024 年 2 月 2 日）

木村亘，2023,「地域のさまざまなスポーツ環境を，質が高く持続可能なものへと変容させるための指定管理受託」,『みんなのスポーツ（日本体育社）』，2023 年 11 月号：18-19.

公益財団法人日本オリンピック委員会,「カーリング」（閲覧日：2024 年 2 月 11 日）
https://www.joc.or.jp/sports/curling.html

間野義之，2013,「NPO 法人スポーツコミュニティ軽井沢クラブ」,『オリンピック・レガシー～2020 年東京をこう変える！』，ポプラ社，東京，pp178-180.

－2019,「オリンピック・レガシーが生んだカーリングの町・軽井沢～『SC 軽井沢クラブ』の挑戦」，徳間書店，東京.

みどりスポーツクラブわっかない，https://midospo.com//（閲覧日：2024 年 2 月 2 日）

本橋麻里，2019,『0 から 1 を作る～地元で見つけた，世界での勝ち方』，講談社現代新書，東京.

大沼義彦，2010,「小さな町の大きな挑戦」，石井隆憲，田里千代＝編著『知るスポーツ事始め』，明和出版，東京，pp2-6.

SC 軽井沢クラブ，https://karuizawaclub-curling.com/（閲覧日：2024 年 2 月 2 日）

スポーツ庁,「総合型地域スポーツクラブ」（閲覧日：2024 年 2 月 2 日）
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/1371972.htm

－「総合型地域スポーツクラブに関する実態調査　令和 4 年度」（閲覧日：2024 年 2 月 2 日）
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/detail/1379861.htm

－「第 3 期スポーツ基本計画」（閲覧日：2024 年 2 月 11 日）
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm

侘美俊輔，2020,「『カーリング部』設立メンバーにおる 4 年間の取り組みと地域づくりの可能性～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～」，稚内北星学園大学紀要 21：46-83.

－2021,「『主体的，対話的で深い学び』に向けた教材としての『カーリング』の可能性～『免許状更新講習』における『カーリング』を活用した授業展開～」，稚内北星学園大学

紀要 22：55-80.
－2023,「『主体性，対話的で深い学び』に向けた教材としての『カーリング』への期待～市内教員向けカーリング授業事前研修の試み～」，育英館大学紀要紀要 1：67-86.
－2024－A,「『屋内専用カーリング場』の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み」，育英館大学紀要 2：印刷中.
－2024－B,「冬季スポーツ振興によるまちづくり戦略とカーリング普及・拡大・選手強化への試み～北海道名寄市職員・カーリング関係者へのインタビュー調査から～」，育英館大学紀要 2：印刷中.
友添秀則，2023,『運動部活動から地域スポーツクラブ活動へ: 新しいブカツのビジョンとミッション』，大修館書店，東京.
東原文朗，2019,「よそでおこなわれていないスポーツを振興していたら，まちづくりにつながった！育つべくして育ったカーリング娘」，松橋崇史，高岡敦史＝編著『スポーツとまちづくりの教科書』，青弓社，東京，pp.118-122.
稚内市，https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/（閲覧日：2024 年 2 月 2 日）.
稚内市教育部社会教育課スポーツ推進グループ，2019,「稚内市みどりスポーツパーク指定管理者募集要項」：1－10.
稚内市みどりスポーツパーク・ホームページ，https://wmsp.info/（閲覧日：2024 年 2 月 2 日）.

●謝　辞

本稿は，JSPS 科研費 JP22K17734「『通年型施設』の完成を契機とした地方のカーリング普及・拡大・選手強化の実証的研究（研究代表者：侘美俊輔）」による助成を受けました．研究経費の助成に感謝申し上げます.

「MSC わっかない」の視察に際し，ご臨席いただきました「SC 軽井沢クラブ」の皆様にも感謝いたします．また，本研究に全面的にご協力いただきました「MSC わっかない」の理事の皆様，ならびに写真や資料をご提供頂きました「MSC わっかない」の事務局にも御礼申し上げます．末筆になりますが, 会議録の文字起こしを担当してくれた育英館大学卒業生の高田康生くんにも御礼申し上げます.

●英文タイトル

Comprehensive Regional Sports Club Based on a "Year-round Curling Arena：Case Study of SC Karuizawa Club

●英文要約

According to the latest statistics from the Sports Agency, the "development status" of comprehensive regional sports clubs in Hokkaido is 52%, the worst in the nation. Under these circumstances, "Midori Sports Park," a complex facility with a year-round curling arena, was constructed in Wakkanai City, Hokkaido, in May 2020, followed by the birth of a comprehensive regional sports club, "Midori Sports Club Wakkanai," in April 2022. In October 2022, ten members

of the board of directors of the "Midori Sports Club Wakkanai" visited the "SC Karuizawa Club," a comprehensive regional sports club in the town of Karuizawa, Nagano Prefecture, to observe an advanced club.

As is well known, the "SC Karuizawa Club" won the second place for men and the first place for women in the Japan Curling Championships in 2024. In addition, four out of five members of the Japanese women's national team who won the World Junior Curling Championship 2022 in May 2022 were members of the club's junior team. At the same time, the management strategy of "SC Karuizawa Club", which includes "earning power", has attracted attention from many researchers.

Therefore, the purpose of this paper is to focus on the visit to "SC Karuizawa Club" by the directors of "Midori Sports Club Wakkanai", and to use the "minutes of the meeting" as the basic data for considering the future direction of the club.

●英文キーワード

Year-round curling arena
Curling
Earning Power
Comprehensive Regional Sports Club
Transition of club activities to the community